

講演録 現代の軍事性暴力と「慰安婦」問題

藤目ゆき

●2012年9月14日東京都中野区で『阿媽とともに・台湾の元「慰安婦」裁判を支援する会』が主催する「慰安婦」問題に関する公開学習会が行われた。この講演録は、講演のテープを起こしたものだ。

<はじめに>

私は日本近現代史の歴史研究、特に女性史を専門としており、公娼制度のことや日本軍「慰安婦」問題のことについて調べたり、報告したりということが仕事です。

今やっている日本史の授業では、「からゆきさん」から始まって、戦時中も日本軍による女性の性奴隷化、戦後の占領軍売春のような問題、また売春防止法というふうに、近代、戦時下、現代という歴史の流れの中で、女性に対する暴力がどのような形で行なわれてきたかということを中心とした女性史をやっています。

この度はその授業に出席していた学生さんの縁ということもあって、お招き頂きましたが、日本軍「慰安婦」問題についていくらか仕事をしてきたとはいっていても、この会の皆さんのように常におばあさんたちと連絡を取り合って、具体的に「慰安婦」問題の取り組んできているわけではないので、どのようなお話しをすることが皆さんのお役に立つのだろうかと聞きましたら、会員の方から三つの質問をいただきました。

その要点をまとめると

1. 米軍基地性暴力と日本軍「慰安婦」のつながり
 2. 「慰安婦」は公娼だという理由と見解
 3. 元「慰安婦」のカミングアウトと女性運動のつながり
- というトピックです。

これだけまとまった形で話していくのは、自信がないのですが、その3点にできるだけ引き寄せながらお話しさせて頂きたいと思います。

まず一つ目には、私が米軍基地問題ということで最近本を出していることがあってのご質問ですけども、米軍基地の性暴力を野放しにしているような日本の政策は「慰安婦」問題を本当に解決しようとしめない政府の態度に通じるものだと思う。軍事的性暴力の本質は変わらないとも考えられる。そういうことについて、きちんと問題に関わってきた観点から、どう考えますかという問いかけをいただいたのです。

二つ目の『「慰安婦」=公娼』論というのは、このところの一連の右派の動きの中で、『河野談話を見直せ』とか『公娼制度だったのだから「慰安婦」も当然だ』こんな発言が出てきている。それに対して公娼制度の研究者としての観点からどう考えますかという話です。

三つ目は、元「慰安婦」のカミングアウトということと、各地の女性運動のつながりについてどう思いますか、ということです。台湾については皆さんがよくご存知だと思うのですが、韓国でもフィリピンでもこの半世紀あまりの間に女性の運動が目覚しく進展してきた、社会の雰囲気もそれに伴って変化をしてきた、こうしたことが元「慰安婦」の方たちが声を上げさせたのではないかと、アジア女性史の角度で研究している者から見るとどういふことが言えるかという質問でした。

<無責任な『慰安婦』＝公娼』発言>

最初に「近代から現代への連続する公娼制度」ということですが、先ほどの質問のように、公娼制度、昔はそういうのは当たり前だった、「慰安婦」「慰安婦」と今ごろ騒いでいるけれど、昔はどこにでもあったことだという議論が浮上しています。しかし、実のところ、これは、この20年以上、いわゆる「慰安婦」問題がクローズアップされてきた頃から、いろいろ表現を変えて、常に言われてきたように思います。そういうことを言っている人たちは、厳密に、何が公娼制度であり、公娼制度とはこういう制度であったと説明ができるわけでもなければ、公娼制度下での女性の経験がどのようなものであったかということを知っているわけでもありません。ただ、昔は売春なんて当たり前の商売だった、貧乏な女の人には誰でもやっていたと、それを一種のブラックプロパガンダ、宣伝・煽動として、「慰安婦」として虐待され名乗りで来た女性たちを貶めるという目的だけで、公娼制度という言葉を持ち出しているのです。この20年来何度もそういうことが行なわれていますけれども、およそ、その公娼制度そのものに関して責任を持った発言は無かったように思います。一種のデマゴギーというか、罵倒の言葉に過ぎない。その意味では、一切無視、相手にしないくらいの気持ちでいてもいいぐらいだと思うのですが、その反面、果たして公娼制度とは何なのか、何なのだとと言えるのか、こういうことも、やはり私たちはしっかりと考えておくべきではないかと、このことも私自身はずっと課題としてきました。

俗に公娼制度というとき、「公の娼」というそのイメージからも、昔はおおっぴらに売春が稼業だった、それが社会制度だったという程度に認識されているわけですが、厳密に言えば、これは公権力が売買春を管理統制する、国家管理売春制度であると言えます。

時代劇などにも、遊郭とかそういうものが映し出されて、江戸時代から何百年も日本の遊郭制度があると、公娼制度もそれでイメージされる方もあるかと思うのですが、もちろんそれはそれで、一種の公娼制度ですけれども、近代の公娼制度というのは、実は他ならぬ欧米の近代国家から始まった制度であるという側面もあります。

<軍隊と近代公娼制度>

いわゆる近代公娼制度というのは、ナポレオン戦争時代にパリで始まったのが最初だろうと言われていています。どういう制度かという、軍人の周辺にいる女性たちの性病検診をして、性の相手になっても病気をうつす心配のない女たちということで管理・登録していたというものです。ナポレオン戦争がヨーロッパ全域に広がると、それに伴って性病が流

行したので、兵隊たちがみんな性病に罹って戦力にならない、これに危機感を抱いたということが背景にあったと言われているのですが、兵隊たちに、性病をうつす心配のない安全な女性を提供するという軍事指導者、国家の為政者たちの発想に始まっているものでした。これがナポレオン戦争を通してヨーロッパ各地に広がってゆき、19世紀の半ばくらいになるとヨーロッパ大陸だけじゃなくてイギリスにも広がってきます。クリミア戦争という戦争がありましたが、そういう19世紀半ばの戦争の時に、イギリスの軍隊はすごく性病に悩まされたわけです。兵隊たちが見境なく女性と関係を持ったということですね。そこですでにヨーロッパでは定着していた売春女性を管理登録するというような制度がイギリスにも導入されます。そこからイギリスの近代公娼制度が立法化されるわけです。同じようにアメリカでも、1862年、南北戦争のさなかに兵隊が性病に罹る、どうするかということで、ヨーロッパ流、イギリス流の売春婦管理を始める。こういう形が近代の軍国主義とか植民地主義と結びついて、ヨーロッパにもアメリカにも広まっていきます。そしてヨーロッパやアメリカがアジアやアフリカを植民地支配下に置いていくと、たいがいその植民地にした土地にこうした売春管理制度を導入していきます。それも一箇所に閉じ込めて監禁するということも含めて、本国以上に徹底して女性たちを管理統制する、例えばイギリスはインドでそれをやります。軍隊を性病から守るために女性に売春をさせ、女性たちを厳しく管理する。性病チェックという意味で一箇所に集めて、閉じ込めるというかたちで管理統制する。こうした制度が19世紀にはもう成立していて、日本が統一国家を作って近代国家を建設していく時にこういう欧米の制度を真似たという面があります。

江戸時代にはいわゆる吉原とか島原とか遊郭が賑わっていますが、昔の遊郭では性病検診などはやらないんですね。けれども、日本が開国していく中で、まずロシア海軍が自分たちの水兵に性病を移されたらかなわないということで、日本の女性たちに性病検診を強要したのが始まりで、明治政府がいろいろな法律や制度を作っていく時に、フランスやドイツでも定着していたこういう売春管理制度を取り入れていきました。ですから、江戸時代から歴史を持っている遊郭制度の上にこういう近代の欧米の軍国主義とか植民地主義と結びついたような女性管理、売春管理というのが上に乗っかっていったのです。日本はそういう公娼制度を、明治時代を通して増強していくのですが、日本が台湾や朝鮮半島を植民地支配下に置いていくなかで、ヨーロッパがアジア各地でしたように、日本もまた台湾や朝鮮半島で日本のこうした公娼制度を発展させていく、そして台湾の女性たちや朝鮮人の女性たちを日本の公娼制度の最底辺に組み込んでいくというようなプロセスがありました。ですから、私は日本軍「慰安婦」問題というのは、こういうふうな長い公娼制度の歴史の延長線上で考えなくてはならないと考えてきました。つまり戦争であるがゆえに特殊に起こった出来事というのではなく、戦争があり、軍隊がある、そういうところで女性たちが性的に蹂躪される、利用される、そしてまた兵士たちが安全に買春できるように国家がアレンジする、こういうふうな制度がすでにあって、それが戦争状態がだんだん激しくなっていくって、軍隊の需要が大きくなっていった時、それまで以上に凶悪な形で、女性たちを連行し、「慰安婦」にするということに繋がっていった。そういうふうに見なければならぬのではないかと思います。

こういう見方は、時には誤解を招くというか、反発を受けることもあります。というのは最初に紹介したように、「昔は公娼制度があったから、みんな売春をやっていたんだ。『慰

安婦』なんて当時はなんでもなかった」、こういう理論があるから、公娼制度や売春とは何の関係のない無垢な少女たちが、無理矢理に連れだされてレイプされた、それが「慰安婦」問題であったと反論せざるを得ない場面もあったことも否定できません。公娼制度と「慰安婦」制度というのは、やはり議論するときに慎重にならざるを得ない結びつきではないかと思えます。

でも先程お話したような意味合いで、日本軍「慰安婦」の連行制度というのは、ある意味で日本の公娼制度が一番凶悪な形で表出したものであったといえるのではないかと思えます。いわば公娼制度の全面開花ですね。

公娼制度があったのだから、「慰安婦」問題は当然という発言に対しては、ケースバイケースということになると思えますが、ある場面では全く無視すればいい、そもそも意味もなく、わけもわからずに言っている者に対してまじめに反論する必要さえがないという思いもあります。他方、そもそも公娼制度というものは国家が生みだしたに女性を犠牲にした制度です。「慰安婦」を公娼だというのであれば、まさに国家の責任であり、国家がその女性を迫害したことに対して、国家の責任において、国家が謝罪し、賠償するという方が、論理的に一貫性があると主張したいと思えます。

以前、戦争責任資料センターの機関誌に書いた事ですが、日本社会には、「慰安婦」は公娼だといえば、それによって元「慰安婦」の方たちが貶められる、軽蔑を受けるという社会状況があります。それに対して、いや彼女たちは公娼ではないと、こう反論することが果たしていいのかどうかという疑問を提起したいと思えます。まず、公娼だった、公娼制度の下にいたという女性たちが白い目で見られるということ、そのありかた自体が、日本社会が未だに女性抑圧的な社会だということを物語っているのではないのでしょうか。

<戦後の米軍「慰安」施設 RAA>

RAA は日本が敗戦し、ポツダム宣言を受諾してわずか3日目という敗戦のほんの直後に日本政府が各地方庁に指令を出してつくらせた売春婦あっせん組織です。RAA(Recreation & Amusement Association) とは、日本語では占領軍性的特殊慰安施設協会という言葉で書かれたものが多かったです。ひらたくいうと、日本が戦争に負けたために占領される、占領軍がやってくる、その占領軍に日本女性を「慰安婦」として提供せよという指令です。戦時中、日本軍「慰安婦」を当然のように国家の政策手段とした日本国家の施政者たちは戦争にこういう「慰安婦」が絶対必要だという観念が深くしみついていて、日本が負けて占領軍が日本に進駐してきた際に見境なく日本の女性が性の暴行を受けてひどい目にあう、だからそういう兵隊の性の相手をする特殊女性を集め、その女性を提供することによって一般女子の「貞操の防波堤」にしようと考えたのです。そのために莫大な予算を講じて関係各省庁が全部動き、各都道府県警察が動員されて各地に本当に「慰安婦」施設がつけられてゆきます。このようにして作られた慰安所の実働部隊は誰かといえば、戦時下に日本軍に女性を斡旋していたような売春関連業者だったりするわけです。そしてまた遊郭や慰安所で働いていた娼妓たちがまっさきに徴用されたし、数が足りないということで、戦争によって父親を亡くしたり、焼け出されて、よるべもなく、食べられない、困窮した女性

たちが大量に集められて、占領軍の相手にさせられたというわけです。何万という女性が関連施設で働かされたのです。

こういうことを見ていると、質問にもあったのですが、現在の基地周辺の性暴力を野放しにしていることが、いまだに「慰安婦」問題が解決しないということにつながっています。軍事的性暴力は、戦前も今も「慰安婦」問題と変わらないのではないかとのご指摘は私も全くその通りだと思います。かつ、本質的に戦争は常に女性を犠牲にする、これはそのとおりだと思いますが、本質はこういうものだけということだけではなく、具体的な事実として続いてきていると思います。たとえば RAA 関連の慰安施設をつくる時、またその運営を考えると、軍隊慰安所の規約を参考にして部署を作っている、軍隊慰安所の業者たちが今度は占領軍慰安所に女の子たちを集めるなど、人的にも制度的にも、もちろん思想的にも途切れなく続いているものとして、日本軍「慰安婦」から RAA の推移があるように思います。

<戦後日本の管理売春>

ところが日本の戦後について、よく言われているのは、戦前・戦中は軍国主義であったり、ファシズムであったり、暗い時代だったが、戦後は民主主義が訪れてきた。日本は民主化され、憲法も新しくなったし、GHQ のおかげで婦人参政権も実現して、いろいろ女性解放政策がでてくるなど、民主化と女性解放の時代へと物事が明るく変化したというイメージです。その明るい話題の一つの例として、それまでに日本にあった制度の廃止令があげられます。公娼制度廃止令、娼妓廃止令、貸座敷廃止令などです。GHQ は確かにそれらを廃止することを指示し、そういった法律は廃止されました。日本の公娼制度はこれで廃止されたと考える人が多いかと思えます。日本政府はそういう建前でいたわけです。しかし、果たしてどうかといえば、ほとんど名目だけです。なるほどその貸座敷規則、娼妓規則という名前の法律は撤廃されたのですが、それまで娼妓と呼んでいた女性たちが接待婦と呼び方が変わるとか、あるいは遊郭とよばれていた地域が特殊飲食店街と呼び名が変わります。しかし、名前が変わっているだけで、賃金は同じ、働いている女性も同じ、業者も代々売春宿を営んでいる業者と、もちろん継続している地域も多いし、また戦後の混乱期に、進駐軍が駐留している地域には新しい売春街ができることなどもあり、そこでは管理売春が行われ続け、警察が常に監視するという構造ができています。かつてのように性病を検診するというのではなくて、自主的に女の人たち、業者たちが自治会という名目で健康のために性病予防をする、実際はそうしなければ売春ができない、そういう形で実質売春が続けられるようにつくられていたようです。赤線とか、特殊飲食店街とか名前を変えて公娼制度が生き延びるのです。公娼制度廃止は名目だけで実体はこうなのだということを日本政府側もよくわかっていたし、GHQ 側もよくわかっていました。占領軍は結構そういう売春婦を利用しました。米軍駐留の多い地域は米軍の側から率先して、将校が遊ぶのにはどの地域がいいか、黒人と白人は別の地域がいいが、どこの地域がいいかなど土地の警察署に斡旋させたり、あるいは、あのへんには性病検診を受けていないストリートガールが多いからちゃんと取り締まりをするようになどといっていくわけです。

そういう戦後の占領軍売春は戦後直後からみられるのですが、とくに朝鮮戦争が勃発す

ると、各地で新しい米軍売春街みたいなものがつくられてきます。朝鮮戦争に出動する米兵たちが日本国内に増えてきて、実際兵士たちが売春婦を求めると売春状況が一層深刻になっていくのです。そういうときに米軍側が何を要求したかという、性病検診を受けない女性たちをもっと取り締まるようにという、そういう米軍の要望を受け入れて売春自治管理取締条例が各地で地方条例としてつくられていくのが朝鮮戦争時代です。朝鮮戦争前からポツポツ作られていくのですが、最初に作られたのが1948年宮城県です。宮城県に駐留していた占領軍の司令官が宮城県の知事や議会の議長を呼びつけてこういう条例を作れと作らせていることが議事録などで明らかになっています。ポツポツ作られていた条例が朝鮮戦争中に何十という地方自治体、とくに基地を抱えていた自治体は売春取締管理条例を作っていくわけです。背後には米軍側の要求があったわけです。

問題は、戦争によって家や家族を奪われたり女手ひとつで子どもを育てたりしなければならぬ貧しい女性が莫大にいる。売春でもしないと生きていけない状況の女性たちが占領軍相手に売春をする。そういうことに対して、女たちが性病を感染させていく、これは悪い、占領軍が迷惑をしているという枠組みで対応がとられていくのです。これは、女性の人権から出発した売春に対する干渉ではなくて、軍隊を性病から守る公娼制度の論理の延長線上に取締まりが行われてきたことです。

<現在も続く本質的な公娼制度>

1956年に売春防止法が制定されて、それまで赤線といわれていたところも営業ができなくなっていくのですが、ここにも大きな問題がありました。公娼制度という、国家が貧しい女性たちの売春を管理、統制するという制度がもし根本的に廃止されるということであれば、女性たちをそのように利用し、搾取してきた自由民主主義国家の責任が問われるはずですが、国家が女性たちに行使してきた暴力を反省し、国家の罪責が認識されてこそ、政府の制度が廃止されたといえるのではないかと思います。ところが、売春防止法の条例はそうではありませんでした。売春をしている人たちは、社会の風俗、善良な風俗を乱し、人道にもとることをして社会に害毒を流している、これは「悪」であると規定しているのです。そして買春している男性たちはそういう悪い女たちのやっていることを幫助しているという、従属的な立場におかれました。国家の責任についても、今まで悪いことを野放しにしてきたのがよくなかったという反省の仕方でした。しかし、それは本質的な意味での反省ではありません。

今まで悪いことをしていたのを黙って見逃してきた、それがいけなかった、これからは厳しく処罰する、犯罪者として厳しく扱うというのです。これは、国家がこの制度によっていままで人権蹂躪的なことをしてきたことの非を認めて制度を終わらせるのではなく、これからは厳しくするというかたちで公娼制度を終わらせていることです。これでは、結局、本質的な意味では公娼制度は終わらないままだと思います。

いま、日本では売春は非合法化にされていますが、日本で売春は非合法だときくと驚く人がたくさんいます。つまり誰もか、売春が行われていることは知っていて、性産業と売春とは表裏一体だと分かっているのだけれど、悪いのは売春婦だということにしました。これは現在も続いています。本来国家が負うべき責任を女性に転嫁にするかたちで公娼制

度が廃止され、売春防止法が制定されたということによって現在もいろいろな矛盾を引きずっているのではないかと思います。本当にさまざまな矛盾があると思うのです。これはやはり日本軍「慰安婦」にもかかわってくるのではないのでしょうか。

売春婦は公娼だ、昔は公娼制度があったといえ、元「慰安婦」であった人たちが軽蔑されてしまう、相手にするに足らない、水商売をやっていた女として後ろ指をさされてしまう、そういう思考枠組みというか、社会規範の枠組みが作られているというのは売春防止法が残した禍根の一つではないだろうかと考えます。

<知られていなかった米軍基地の性犯罪>

ここで話題を変えて各地で相次ぐ米軍基地の女性に対する犯罪について話をしたいと思います。これは売買春というカテゴリーで考えられがちですが、米軍占領下で相当たくさん性の犯罪・レイプ事件が起こっていました。占領が終わったあとになって暴露され、実は占領下において、一年に何万件もレイプ事件があったという見積もりもあります。それは結局、占領下では占領軍は絶大ですから、言うに言えない、許されないということがあったからです。占領が終わったら問題はなくなったかという、そうではありませんでした。

1952年4月講和条約が発効して確かに占領は終わりますが、それは同時に日米安保条約が発効したことでもありました。占領軍であったものが日米安保条約に基づく駐留軍として駐留することになったのです。これもまた名前が変わっただけで、兵隊が着ている服もいっしょです。その結果、基地周辺では占領下で発生していた性暴力や性犯罪がそのまま引き継がれたわけです。

岩国基地周辺での犯罪をあわせてごらんください。一つ一つを紹介できないのですが、この調査をみれば占領下ではないが、まるで占領下と変わらない女性たちへのレイプや、殺人事件がしばしば起きています。私はここ10年くらい岩国基地のフィールドワークをさせていただいているのですが、最初取り組みはじめたのは地元の新聞をみて、こういう事件が頻々とおきていることにショックを受けたからです。というのは、70年代、75年にベトナム戦争が終わったあとぐらいに殺される人が多くなっています。まさに惨殺される女性が多くなって、死体が損壊されている、乳房を切り取られたり、性器が損壊され、腸が引きずり出されているというむごたらしい殺され方をしているようになっています。ショックを受けたのはこういうむごたらしい殺され方というのも一つでしたが、もう一つはなぜこういうことを知らなかったのかというショックだったのです。

私は79年に大学に入る年齢だったし、岩国という基地は関西にいれば何となく知っている地域です。原水爆禁止大会に行ったりしており、興味がないわけでもないはずだったのに、学生時代、こういう話をついぞ聞いたことがないし、女性史を勉強しはじめても知りませんでした。10年くらい前にその土地で基地問題に取り組んでいる方の集められた新聞記事の切り抜きを拝見している中で、記事を見つけてびっくりしたわけです。こういう凄惨な事件が起きているのに、なぜ私は知らなかったのかと。縮刷版を図書館に見に行ったのですが、地元のローカル新聞にはいくら載っているけれど、大阪や東京などの新聞には載っていない。つまり殺人が起きているようなケースでありながら、新聞にも、報道

されない、国民に知らされないような扱われ方がされて、知らされていないということに気がつきました。そういう意味でもショックを受けました。

<重なり合う二つの経験>

ようやく日本軍「慰安婦」問題という光があてられるようになったのは 90 年代ですけれども、一方でこういった軍隊の性暴力が戦後も続いていながら、報道さえされていない、一体これは何なのかと疑問に思いました。ちょうど女性国際戦犯法廷が開かれようとしていた時期です。もちろん私は日本軍「慰安婦」問題の解決を願う者ですが、今でもまだ日々新しい「慰安婦」問題が生み出されているのではないかという角度でも考える必要があると思いました。

そういう女性たちが果たしていつカミングアウトできるのか、いつ彼女たちの正義の実現するのか、日本軍「慰安婦」がそうであったようにあと 50 年、半世紀の沈黙を破るということに 50 年もかかってはいはずがない。今も起こっている問題がある、その意味を問うことなくして日本軍「慰安婦」問題を解決するというのは筋が通らない。過去の日本軍「慰安婦」問題、今も起こり続けている「慰安婦」問題は一つのことだという直感があって、軍隊の性暴力問題を岩国基地を中心に調べてきたわけです。

その後、私が一番親しくお話を聞かせていただいたのはフィリピンの元「慰安婦」被害者のマリア・ロサ・ヘンソンさんという女性です。ロサさんが自伝を書かれていて私が日本語訳して出版したのですが、その出版記念会でロサさんは、～沖縄の少女レイプ事件がちょうどその1995年に起きたのですが～、まだ小学生である少女が3人の米兵に集団レイプされたという話を聞いて、「あの沖縄の少女は私だよ。あの少女の経験したことは私が経験したことと同じだよ」と言われたのです。ちょうどロサ・ヘンソンさんが名乗り出られた時期というのは日本の自衛隊が海外に派兵されていく、PKOが制定されたときで日本の自衛隊が大手を振って海外に出かけて行くと報道されたというタイミングだったのです。ロサさんにしても他のおばあさんたちにしても、日本が再び軍隊をアジアに、外国に送りだしていくという国だということと、かつての自分の経験と重ね合わせておられましたし、いま、米軍基地の周辺で性暴力がおこっているということと、自分が日本軍によって侵略された経験とを重ね合わせておられました。このことは私にとって、おばあさん達の経験を引き継ぐとともに日本で現に行われている暴力に立ち向かうことが必要だと考えさせられる契機になりました。

具体的にこの 10 年にどんな事件があったかということについては、あとで資料を見て頂ければいいのですが、2001年に、今、お話したような問題意識をもって「軍事基地と女性」ネットワークというひとつの仲間のつながりを作りました。この 10 年を振り返ってみますと各地の米軍基地では頻々とレイプ事件がおきておりました。この「軍事基地と女性」ネットワークが発足したときに沖縄からの参加者がきて下さいました。一人は米兵にレイプされたという方で、もう一人の方は女性国際戦犯法廷で沖縄にあった日本軍慰安所のことを問題化するときに大きな役割をはたした浦崎成子さんです。ちょうど 9・11 同時多発テロの直後で、新しい戦争が、空爆が始まったときだったのですが、その浦崎さんが、「アメリカの国家テロリズムは沖縄の女性に対しては今も毎日降り注いでいます」と言われた

のが印象に残っています。

それから 10 年経っていますが、岩国でも沖縄でも、あるいは佐世保とか横須賀とか、各地で事件が起きています。とくに 2007 年から 2008 年の半年くらいの間にあまりにもひどいと思われる 3 つの大きな事件がありました。もちろん水面下ではもっとたくさん事件が起きていると思いますが、この 3 件は新聞にも大きく報道されています。

2007 年 10 月には岩国の海兵隊員たちが一人の広島的女性を集団レイプする事件がありました。それが不起訴になってしまうのですが、それから半年たたない間に沖縄の中学生の女の子、それから 1 週間もたたないうちに、来日して 3 日ぐらいしかたっていないフィリピンから出稼ぎにきた 20 歳前後の女性が米兵にレイプされるという事件が相次いでおきました。3 つの事件とも日本の裁判では裁けず不起訴になりました。

<現代につながる「慰安婦」問題>

時間が終わりに近づきましたが、サバイバーのカミングアウトと日本社会の女性抑圧ということに、話を移したいと思います。

元「慰安婦」の人たちが名乗り出られた背景に女性の運動の広がりがあったのではないかということには、私もそのとおりだと思います。

日本軍「慰安婦」の制度にせよ、基地周辺の性暴力や売春にせよ、そこで被害にあった女性が日本の裁判に訴えても、加害者が日本の法廷で裁かれないという事実には、これらは結局、女性の人権、社会正義が、軍隊の利益、国家の利益に従属させられているということです。

性暴力の被害者である女性たちが暴力を生き延びてカミングアウトして社会に被害を訴えたときにどんなにひどいバッシングにあうかということでも、日本軍「慰安婦」と現代の性暴力被害者とはつながっていると思うのです。

最近、在特会の人たちが活発に動いていて、『慰安婦』被害女性たちは売春婦だと聞くに堪えない罵詈雑言を繰り返していますが、現代の軍事性暴力の被害者たちも同じです。広島集団レイプ被害にあった人も、沖縄の二人の女性もそうです。以前なら子どもの被害には社会の同情がいくらかはあったのに、今は中学生の少女に対してさえインターネットの世界ではひどい言葉を投げつけています。フィリピン人の女性の場合、フィリピン人なんか売春婦だなどと民族的偏見と差別があらわにされています。いつでも、そこでは売春婦、公娼というところをもっていけば、女性たちは相手にされなくなる、レイプがレイプだと認められなくなるというところに貶められています。売春婦だ、尻軽女だと罵れば女性たちを貶めることができる、そういう貶めかたに効果があるということが、女性を抑圧している社会だというあらわれではないかと思います。20 年以上、日本軍「慰安婦」のおばあさんたち、支援者たちが運動しているのに関わらず、今日に至るまで日本政府は戦後補償に呼応していないわけですが、ここにあらわれているのは過去の解釈の問題というより、日本社会がいかに抑圧的かという問題だと思います。逆にいえば、そういう抑圧が許せないと思い、ここでは生きてはいけないと思う、人権が尊重される社会に生きたいと願う、そうした思いがあるからこそ、過去の問題も戦後補償の問題も大事な問題として取り上げていく力になるのではないかと思います。

<女性たちを支える連帯の意識>

この20年、私はさまざまな場面で感じるがありました。とくに私はフィリピンとの関わりが多かったのですが、フィリピンの女性団体の方が来日して、マリア・ロサ・ヘンソンさんがカムアウトされた話をされたときの感動を今も忘れることができません。ロサ・ヘンソンさんご自身にもお会いしました。彼女も半世紀沈黙を守って、自分を恥じ、暗い日々を抱えてきたのですが、女性団体の人から「あなたの恥ではない。悪いのは日本軍であり、悪いのはあなたではない、勇気をもって立ち上がって下さい。女性の人権社会、正義のために立ち上がって下さい」と言われた、それを聞いたとき、はじめて、ロサさんは自分の恥ではなく、普遍的な大事なこと、悪いのは自分ではないと本当にそう思うことができ解放されるのです。ロサさんが名乗り出ることができたのには女性人権思想の深まり、そういう女性たちの運動があったからです。台湾の方が名乗り出られたときも同じだっただろうと思います。逆に言うと日本社会では名乗り出ていないというのは、それだけ女性に対する白眼視が強い、抑圧の強い社会だからだろうと思うのです。

韓国では基地村の女性たち、基地村というのは駐韓米軍の周辺につくられている歓楽街ですが、その女性たちがいま高齢化しているわけです。朝鮮戦争からベトナム戦争の時代に若かった人たちも今では高齢になっています。基地村では韓国人よりもフィリピン人やロシア人が多くなっていると大分前から言われていますが、そういう基地村の女性たちを支援する人権運動が韓国では盛んです。日本軍「慰安婦」問題の運動をしている人たちと基地村を支える運動をしてきた方たちとは、重なっている部分もあれば協力関係もあって、少なくともつながっているという印象をうけましたし、勇気づけられました。

去年(2011年)は金学順さんのカムアウト20年、日本大使館前で行われている水曜行動も1000回という節目の年でしたが、12月にちょうど韓国に行っていました。日本軍「慰安婦」問題の取り組みに対して基地村の女性たちがそこに連帯の意志をもってやってこられて、お互いに励まし合う、もと「慰安婦」のハルモニたちが自分たちより若い基地村の女性たちを勇気づけ、また基地村で生きてきた女性たちがハルモニたちをねぎらうというように、運動をやっている人たち自体がつながりを意識しておられるのですね。そこには複数の世代の女性たちをつなげていくという面もあると思うのです。

今、韓国では基地村の中では朝鮮戦争やベトナム戦争時代に国家によって性を利用して韓米軍事同盟の犠牲にされた女性たちに謝罪と補償をとという運動もあります。

そういう観点からみると、たとえば岩国基地村の周辺にも朝鮮戦争、ベトナム戦争のとき多いときには何千という兵隊がいて、1000人を超える売春女性が岩国基地周辺にいた時期があります。今も天涯孤独で行くところもなく暮らしておられるお年寄りの女性たちがおられるのですが、韓国の基地村で働いて厳しい人生を生きてこられた女性たちが今、包まれているような支援をその岩国基地周辺の女性たちが受けているか、あるいはそこで生きている女性たちと日本軍「慰安婦」にされた世代の女性とのつながりを日本人が意識しているかといえ、あまりそういう観点では見られていないのではないかと思います。韓国、フィリピンは日本の植民地支配下、占領時代がありましたし、戦後は南北分断とか新植民地主義の中で内戦があり、フィリピンでは今も武力紛争があります。そのようにきびしい情勢の中で女性運動もそれだけ強く、それだけ深いものでなければやってこられな

ったという面があるかもしれませんが、そのような女性の運動から連帯の意識が出てきたのだと思っています。

日本軍「慰安婦」の問題も、単に過去の問題としてとり扱うのではなくて、現在進行中の問題として考えるとき、日本の軍事化や、日本社会での女性の人権という大きな問題としての観点に結びつくのではないかと思います。

<会場の質問から>

★Q. RAA は、占領軍の要求だったのかどうか？

A. RAA は日本政府からの提案です。しかし、占領軍の側からも売買春斡旋の要望が出されたり、売春管理に関して日本の行政への介入があったことは、多くの資料から判明しています。

★Q. 公娼制度は欧米にもあったことが分かったが、それは普遍的な問題だとすることができるか？

A. 普遍性がある問題だといえます。その意味では日本人が特別に悪辣で残虐であったわけではありません。が、天皇制のもとで近代国家が築かれた日本の特殊状況があることも見逃せません。市民的自由や人権の意識が希薄なことから、公娼制度下の女性や「慰安婦」として連行した女性に対する処遇が特にひどかったといえるでしょう。

★Q. 現代の問題を考えると、日本の若い人の中の平均的な意識の中には、そうした問題に反応しないというところもある。

A. 弱者の側から歴史を見る視点がほしいと思います。また日本の社会をおおう先行きへの不安の中で、若い人たちがおかしいと感じることをおかしいと発言することがとても重要だと思います。